国立国語研究所学術情報リポジトリ

出雲方言の指示詞カ，サに関する報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002421

出雲方言の指示詞カ，サに関する報告

荻野　千砂子*[1]

１　はじめに

2014 年度に実施された出雲方言調査の文法班の調査票の中に，指示詞コレワ，ソレワを含む項目があった。９番目の「それはおとうとのかもしれない」と４２番目の「これはかつおだろう」の二項目である。それぞれの地点の回答は次のようになっている。

９．　それは　おとうとの　かもしれない。

1.安来市	soitɕa: oto:tonobundaɲikajaæ. ソイチャー　オトートノブンダニカヤえ.
2.奥出雲町	so:wa {oto:to no / oto:toga} {jatsɨ / buŋ} kamo {ɕiɾeɴ～sɨɾeɴ}{jo / dʑo}. ソーワ　{オトートノ　/　オトートガ} {ヤツィ　/　ブン}　カモ　{シレン～スィレン}　{ヨ/ヂョ}.
3.雲南市 A	{soɾa / so:wa} oto:tono kamo {ɕin / ɕiɾen}na:. {ソラ　/　ソーワ}　オトートノ　カモ　{シン　/　シレン}　ナー.
3.雲南市 B	soɾɨwa oto:tono kamoɕiɾe:ɴ. ソリワ　オトートノ　カモシレーン.
4.出雲市 A	sa oto:tono kamoɕeɴ. サ　オトートノ　カモシェン.
4.出雲市 B	soɾewa oto:tono kamo ɕen《no》. ソレワ　オトートノ　カモ　シェン《ノ》.

４２．これは　かつおだろう。

1.安来市	ko:wa katsuo{daɾa /daɾazojaæ}. コーワ　カツオ{ダラ　/　ダラゾヤえ}.
2.奥出雲町	koɾja: {katsio～katsɯo} daɾa:《ga》. コリャー　{カツィオ　/　カツオ}　ダラー《ガ》.
3.雲南市 A	koɾa katsu̥odaɾaga. コラ　カツオダラガ.
3.雲南市 B	koɾewa {katsuodaɾo: / katsuodazɨ　（かつおだ）}. コレワ　{カツオダロー　/　カツオダズィ}.
4.出雲市 A	ka kattso {daɾa: (多) / daɾo:}. カ　カッツォ　{ダラー(多) /　ダロー}

９の「それは」に該当する言い方は，各地点においてソイチャー，ソーワ，ソラ，ソリワ，ソレワが見られるが，出雲市Ａにはサという回答がある。また，４２の「これは」に該当する言い方は，各地点においてコーワ，コリャー，コラ，コレワが見られるが，出雲市Ａにはカという回答がある。ここから，カはコレワに，サはソレワにそれぞれ対応していることが予想できる。

*1　おぎの　ちさこ：福岡教育大学・准教授

調査票では出雲市のA話者のみが使用しているが，実は，カもサも出雲方言話者にとってはなじみがある言葉だという。巻野辰雄著『出雲のことば早わかり辞典』（2001 年）によると，次のような記述がある [2]。

カ：　これは。「カ，お前のもんか」

このようにカはコレワに相当すると認識されていることが分かる。音声的にもコーワ（koowa），ソーワ（soowa）が短音化してカ（ka），サ（sa）となる可能性は十分にある。とはいえ，カとサが，コレワ，ソレワと全く同じ機能を有するかという点に関しては疑問が残った。そこで，カ，サに関しての追加調査を 2015 年 11 月 6 日と 7 日に行った。6 日は，島根県教育庁文化財課の職員の方 3 名が調査に協力して下さった。その結果を踏まえて 7 日に詳細な調査を行った [3]。7 日は，昭和 7 年生まれの男性と昭和 25 年生まれの男性が調査に協力して下さった。これらの追加調査において明らかになったことを以下に述べる。

２　調査結果

２．１　カの感動詞的用法

11 月 6 日の調査では，主にカの使い方について比較的自由に内省してもらい，おおまかな情報を収集した。話の中で，カは話し手領域の物を指すこと，サは聞き手領域の物を指すことを確認した。当初，カとコレワは同一の用法を持っているかのように思われたが，次第にカとコレワには異なる機能があることが分かってきた。カの特徴について，以下（A）～（C）にまとめる。用例の表記は，簡易な音声表記とし，促音は子音連続で表し，長音は母音を重ねて表記する。また，形態素境界は-で，語境界は=で表す。

（A）カは感情が高まったときの批判的な場面で使いやすい。

例えば，自分の部下が提出してきた書類がとんでもないものだったとする。部下を叱る場合に上司はカを用いることができる。

(1)　ka　　nan=daja.
　　カ　　ナン=ダヤ.
　　これは　　なんだ！

しかし，もし自分が陶芸を趣味としていて，ある日，会心の作ができたとする。「うん！これはいい」と褒めるときにはカが使いにくくなって，コレを用いるという。

(2)　kora　　e=da　　ne=ka.
　　コラ　　エ=ダ　　ネ=カ.
　　これは　　いいじゃ　ないか。

[2] 出雲市市民文化部文化財課の職員の方に該当箇所の PDF ファイルを送って頂いた。
[3] 7 日の調査も 6 日に引き続き文化財課の職員の方が同席して下さった。また，午後の調査では，出雲市市民文化部文化財課の職員の方も同席して下さった。お二人の意見も反映させている。

ただし，カは全くの非文にはならない。自分のものを褒めることがないので，いいにくいだけかもしれないという意見もあった。とすると，文法的には使用可能だが使用場面に何らかの偏りがありそうである。叱るときに使いやすいという話なので，感情が高まった場面で使いやすい傾向があると言えそうである。

（B）同等の人間関係，または目上から目下の人間関係において使用する。

目上の人に対してはカが使用できないという。目上の人でも親しい関係の人や伯父ぐらいの人であれば，「これは何ですか？」と質問するとき，丁寧語「です」を用いて次のように言ってよい。

(3) ka　nan=desu=ka?
　カ　ナン=デス=カ？
　これは　何ですか？

しかし，明らかに目上の人だと認識している場合にはカは使用できない。また，店員など初対面の人に話しかける場合や，改まった場合にも使えないという。つまり，カが使えるのは，日常の場面であり，人間関係は親しい間柄でなければならないということになる。

（C）感動詞に相当する用法がある。

次に，夫婦二人の会話で，夫が捜し物をしているが物の名前を思い出せないで困っている場面を想定した。
夫「アレはどこに置いたかね？」
妻「アレって何ですか？アレだけでは分からないですよ」
この後しばらくして，妻が夫にある物を提示したとする。
妻「お父さん，もしかしたら，コレのことですか？」
妻が提示したコレが，まさに夫が捜していたアレであった場合に次のように言える。

(4) ka　kjan　toko=ni　atta=kaja.
　カ　キャン　トコ=ニ　アッタ=カヤ.
　おっ！　こんな　ところに　あったか。

共通語では，発見した喜びで「おっ！」とか「あっ！」等，感動詞が出てきそうな場面である。「おっ！こんなところにあったか」と言うのが自然であろう。「これは，こんなところにあったのか」と，わざわざ指示詞コレワを使いそうにない。とすると，カには感動詞的な用法があると言えそうだ。しかし，共通語のコレワも「これはこれは。驚きましたよ」のように感動詞的用法で使用できるので，類似の用法かもしれない。しかし，（A）の「感情が高まったときの批判的な場面で使いやすい」という用法を考え合わせると，感動を現す場面に使用が偏るというのはカの特徴として重要ではないかと考えられる。

以上のように見てくると，カは単純にコレワに相当しない可能性が出てきた。

２．２　カ，サの使用制限

7日の調査で，さらに明らかになったのが，次の（D）と（E）である。

（D）カには格助詞が下接しない。だが，ガ格相当の場合でもカ単独で使用可能である。

カに格助詞を下接させてみたが，「*カが」「*カを」「*カに」とは言えない。よって，カに格助詞は下接しないと言える。この特徴は，カがコレワ，サがソレワと助詞「は」を含んでいるためであると考えることもできる。しかし，用法を確認していると「これが」相当の場合にもカ単独で使用できることが分かった。例えば，部下が書類を持って来たが，上司は不備のある書類だとして叱ったとする。このとき，上司はカもコレも使用可能である。

(5) ka/kore　　nan=da.
　　カ/コレ　　ナン=ダ.
　　これは　　何だ。

その後，上司が書類の特定の箇所を指さし「これが問題だ」と指摘したとする。その場合，(6)も(7)も使用可能である。

(6) koko=ga/ kore=ga　　mondai=da.
　　ココ=ガ/コレ=ガ　　モンダイ=ダ
　　ここが/これが　　問題だ。

(7) ka　　mondai=dana.
　　カ　　モンダイ=ダナ.
　　これが　　問題だ。

書類全体を指して「これは何だ」と叱った後に，書類の一部を指すときは「｛ここが/これが｝問題だ」とガ格を使用するのが一般的である。「これは」は使いにくい。よって，(7)のカは「これガ」に相当すると考えてよさそうである。とすると，カは助詞「は」を含んでいない可能性も出てくる。「カ＝コレワ」ではなく，「カ＝コレ」だとすると，カとコレに何らかの違いがあるはずである。そこで，調査内容を変更しようとした矢先，「カ＝コレ」とも考えられない特徴が新たに出てきた。

（E）カとサは，最初に見た物を指すときに使用できる。しかし，吟味した後や，熟考した後で同様の物を指す場合は，カもサも使用が不可能となる。

先に上司に注意を受けた部下は，上司に指摘された部分を徹夜で書き改めたとする。次の日に上司に書類を再提出した。その書類を見て上司が，「これはいいね」と褒めたとする。

(8) koo=de　　ee.
　　コー=デ　　エー.
　　これで　　いい。

(8)ではカが使用できない。「これで，いい」や「これなら，いい」等，コレデやコレナラを使うためではないかと考えたが，話者はそういうことではないと説明する。カは吟味した後や熟考した後では使えないという。逆に，熟考する前であればカが使用できるという。だからもし，部下が最初に完璧な書類を作成して来たら，上司は次のように褒めてもよいという。

(9)　ka　　ee=zo.
　　カ　　エー=ゾ.
　　これは　　いいね。

この特徴は，カとコレとの決定的な相違点である。コレにはこのような制限はない。

以上，カの使用制限が明らかとなったので，同様の制限がサにも見られるのではないかと考えた。そこで，次のような場面を設定した。友達が着物を買おうとして，あれこれ選んでいるとする。友達が試着したのを見て，次のように感想を述べる。

(10)　sa　　ee=zo.
　　サ　　エー=ゾ.
　　それ　　いいね。

最初に見た物，あるいは，瞬時に見た物を指す場合にはサが使用できる。しかし，いくつか着物を試着した後で，最後に友達が着た物が一番似合っていると判断する場合，サは使用できない。(11)のようにソレとなる。

(11)　soo=ga　　ee.
　　ソー=ガ　　エー.
　　それ　　いい。

吟味した後や熟考した後ではサは使えず，ソレが用いられるという。ガ格，ヲ格の問題ではなさそうだ。

以上のような特徴があることを考えると，カはコレ，サはソレとは異なる意味用法を持っていると考えられる。コレ，ソレと関係がないとすれば，カとサは何から生じた語であろうか。

３　連体詞のキャーンとシャーン

カとサの出自を考える上で,連体詞のキャーンとシャーンが参考になるのではないかと考えた。キャーンとシャーンは，キャン，シャンと短音化することも多い。次のように使用される。

(12)　kjaan　　si=wa　　mıta　　koto　　nee.
　　キャーン　　シ=ワ　　ミタ　　コト　　ネー.
　　こんな　　人は　　見た　　こと　　ない。

(13)　sjaan　　koto　　sıra-n.
　　シャーン　　コト　　スィラン.
　　そんな　　こと　　知らない。

キャーンとシャーンは，一般的に，指示副詞のコゲ，ソゲと関連を持つ，コギャーン，ソギャーンの音声的な省略であると考えられているようだが，そうではない可能性もあるのではないだろうか。

室町時代のオ段長音には開合の区別があったとされる。*au から生じたオ段長音は，開音の *ɔɔ となり，*ou から生じたオ段長音は合音 *ooとなったと推定されている。開音 *ɔɔ は，江戸時代には合音 *oo と融合したので，現代共通語ではオ段長音に開合の区別はない。「かような」「さような」は，歴史的仮名遣いでは「かやうな」「さやうな」であり，音声的には *kajauna, *sajauna から *kajɔɔna, *sajɔɔna を経て，江戸時代に *kajoona（カヨーナ），*sajoona（サヨーナ）

となったと推定される。しかし，出雲地域では開音はaaで実現している。出雲方言において「かやうな」「さやうな」は，次のような過程をたどったと考えられないだろうか。

*kajauna→*kajaana→*kjaana→kjaan（キャーン）

*sajauna→*sajaana→*sjaana→sjaan（シャーン）

このように考えると，室町時代に多用されていた「かやうな」と「さやうな」がそのまま出雲方言に残っていると言えそうだ。とはいえ，出雲方言での指示詞体系全体をみると，コレ，ソレ，アレ等のコソア指示詞体系が主軸となっている。そのため，コソア指示詞体系の中に，カ系指示詞由来の語であるキャーンとサ系指示詞由来の語であるシャーンが組み込まれているということになる。

出雲方言には，他にも古語のサ系指示詞が関連していると思われる例がある。相手が言ったことに対して，「さあ，どうかな？」という半信半疑の気持ちを表すときに，次のように言える。

(14) saare.
サーレ.
さあ，どうかな？

これも，サ系指示詞が関連したsa-are（サ-アレ）から生じた語ではないかと考える。サーレの出自は定かではない。室町時代末に上方において「さあれば」という接続詞が多用されているので，この語と関連があるかもしれない。「さあれば」からサーレと独立して，「そうかな」という意味を持つ感動詞になった可能性はある。

以上，古語のカ系指示詞やサ系指示詞が出雲方言に残存する現象が見られることを確認した。これらが，カとサにも関係があるのではないだろうか。

４　カとサの本質

では，カとサは本質的にどのような機能を持っているのであろうか。カとサが使用しやすいのは最初に物を指す場面であり，熟考した後ではカとサが使用できなくなった。これは，カとサが，実は純粋な物指示機能を持っていないということを意味しているのではないだろうか。（A）感情が高まったときの批判的な場面で使いやすい，（C）感動詞に相当する用法がある，という特徴を考え合わせると，物指示というよりも，むしろ「このような事態」「そのような事態」という，初見の場面全体を指示するのではないかと考える。

そこで，場面として，私が部屋に入ったら子供が瞬時に何か物を後ろに隠したところを想定した。「それは何だ？」と尋ねる場合は，サもソレワも使用できる。しかし，続けて「それを見せなさい」というときには，サが使用できない。これは，ヲ格が下接しないからというわけではなく，サでは，子どもが隠した物を指せないからではないかと考える。サは，「子どもが何かを隠したこと」全体を指しているのではないかと考えるわけである。

(15) a　sa/soo=wa　nan=da？
サ/ソー=ワ　ナン=ダ？
それは　何だ？

b　*sa/ so=o　　mise=te　　mɪ-ta.
　　サ/ソ=オ　　ミセ=テ　　ミ-タ.
　　それを　　みせて　　みなさい。

カやサは指示代名詞というよりも感動詞的な場面指示用法が強いと考えられる。

そう考えると，話者の意見で納得できることがある。実は，カとコレ，サとソレを比較しているときに，話者から「カやサを使うと弱い感じがする」という見解が示された。「弱い」というのは，「はっきりと決められない」ことらしい。例えば，友達がハンカチを落としたとする。私が，友達の後ろに落ちている布を指で指して，「それはあなたのハンカチではないのか？」と尋ねるとき，次のようにサを用いて言える。

(16)　sa　　cigau?
　　サ　　チガウ？
　　それと　　違う？

ただし，(16)のサは，自分に確信がないときに使うという。一方，(16)を「ソレと違う？」とソレを使って言うと，私がハンカチの色や模様を知っていて，間違いなく友達のハンカチだと確信している感じがするという。サとソレで「弱く思うか，強く思うか」という差が出てくるという。カに関しても同様の意見が出てきた。店で手に取って品物を選ぶとき，カを用いると「この品物は，まあ，いいかな」という意味あいが出てくるという。

(17)　ka　　e=gana.
　　コレ　　エ=ガナ.
　　これ　　いいな。

あれこれ品物を手に取って，「これも，まあまあだな」「あ，こっちも，まあまあだな」というときは，カを連続して使ってよい。「まあまあ，いいな」と「弱く」思っているときには，(17)を繰り返し言うことができる。しかし，すばらしい品物を見つけて「ああ！これはいい！」と一つの物を「強く」思ったときは，カではなくコレを用いるという。具体的な物を指し示すのがコレとソレの用法であり，その場の事態全体を指すのがカとサの主たる用法であるならば，具体的な物をカやサで指そうとすると，相対的に弱く感じられるのかもしれない。

以上，出雲方言のカとサが，コレ，ソレではなく古語の指示詞カ，サ由来の語であり，指示代名詞というよりも感動詞に近い場面指示用法を持つのではないかという見解を述べた。ただし，指示詞体系の中においては，カは自分に近い範囲の事態を指し，サは聞き手に近い範囲の事態を指すので，カはコ系指示詞，サはソ系指示詞に関連した領域を持つと考えられる。また，今の時点で，カとサの明らかな出自は不明である。指示副詞のカとサがそのまま独立した可能性もあるし，連体詞のキャーン，シャーンのキャー，シャーの部分が直音化した後に単音化してカ，サとなった可能性もある。今回の調査で，サが時折シャと発音される現象も見られたので，連体詞シャーンからシャが生じ，それがサと直音化した可能性は高いのではないかと考えている。今後も継続的に調査を行い，カとサの特徴についてより明確な記述を試みたい。